

## 日10-111

### 「大奥」 ★★★

2010（平成22）年9月9日鑑賞<試写会・梅田ピカデリー>

監督：金子文紀

原作：よしながふみ『大奥』（白泉社刊）

水野祐之進（貧乏旗本）／二宮和也

徳川吉宗（徳川第八代将軍）／柴咲コウ

お信（名門薬問屋の娘、水野の幼なじみ）／堀北真希

鶴岡（剣の達人）／大倉忠義

垣添（呉服の間の少年）／中村蒼

松島（御中臈の中で最も優れた男）／玉木宏

水野頼宣（水野の母）／倍賞美津子

杉下（古参の大奥仕え）／阿部サダヲ

藤波（大奥総取締）／佐々木蔵之介

2010年・日本映画・116分

配給／松竹、アスミック・エース

#### <たしかに、このアイデアは面白い！>

男と女の出生率と生存率がほぼ1対1になるのはきっと「神のおぼしめし」だろうが、男だけが患う疫病によって男の数が何と女の4分の1に！そんな時代が、紀州から第八代となる女将軍・徳川吉宗（柴咲コウ）を迎える直前の徳川時代にあつたらしい。本作「序章」には、そんな時代における女の役割と男の役割の「素描」がある。男が少ないのだから女だって力仕事に従事するのは当たり前。しかし、それ以上に切実な問題は、女が子供を産むにはどうしても男がいるため、その子種をどうやって授かるかということ。もっとも、子種を授けてもらうという「目的」と、女だってセックスの快楽を求めたいというニーズとの線引きは微妙だが、そんな時代男を金で買うという浮世が出現したのはある意味当然のこと。タダで女に子種を授けている貧乏旗本の水野祐之進（二宮和也）の姿や、大奥に仕えている水野の先輩・杉下（阿部サダヲ）が語る小さい時から金で買われていたという苦勞話を聞いていると、その実態がよくわかる。

男が女の4分の1になったら、圧倒的に女にモテるから大歓迎。一瞬そう思いがちだが、現実はそうでもないようだ。なるほど、たしかにこのアイデアは面白い！

#### <実需？それとも権威の象徴？>

「大奥」をネタにした映画は『大奥』（06年）などたくさんあつたが、そこで描かれたのは女たちの権力争いと嫉妬心がうごめく想像を絶する世界。つまり、将軍サマの「お手つき」を得て、うまくいけば「ご懐妊」を求めて、日夜女たちが競いあつたわけだ。しかし、そんなシステムが成り立つのは、将軍サマは何人でも何十人でも女とセックスをして「お世継ぎ」を得るのが大切だという価値観と、男はそれが可能な動物だという前提があつたこと。つまり、男によってはたくさんの美しい女を侍らせ、自由に手をつけるというのはある意味理想？

もちろん、女将軍だってその気になれば美男を取っかえ引っかえしてセックスに励むことはできるが、生理的に一定期間はそれができないうえ、いったん妊娠してしまうと産むまでは大奥とおさらばしなければならないことになる。また、いくらセックスに励んでも、女将軍サマが産むことができるのはせいぜい10人前後？こう考えると、ホントに実在した徳川時代の大奥はいわば実需から成り立つシステムであつたのに対し、発想を逆転した本作における大奥は、セリフの中でも語られているように「男が不足しているご時世でも、美男を3000人も集めているぞ！」という徳川幕府の権威の象徴？

#### <化粧し、着飾った男たちの魅力は？>

本作では、大奥総取締の藤波（佐々木蔵之介）は将軍サマのお相手をするのではなく、松島（玉木宏）ら御中臈が将軍サマのお相手をするらしい。前半のハイライトとして登場する美貌の剣士・鶴岡（大倉忠義）はもちろん、水野に何かとアドバイスしてくれる古参の杉下にしても、みなそれなりにカッコいい。八代将軍となつた吉宗がはじめて大奥を「総触れ」に訪れた時に発した、「何と男たちが美しく着飾っていることよ！」という言葉がいかにもピッタリだ。本作の観客も男1に対して女4というわけではないが、こんなに美しく化粧し着飾った美男達を鑑賞できるのは女性客はうれしいかもしれないが、男の私はちょっと・・・。

大奥には男しかいないのだからそこに男色がはやるのは当然だが、松島と鶴岡、藤波と松島の怪しげな雰囲気を見つめるかどうかは好みの問題。また、水野が呉服の間の美少年・垣添（中村蒼）に対して、「一生の思い出」として軽いキスを授けるシーンも、どちらかと言うとノーサンキュー。さあ、そんな風に美しく化粧し、着飾った男たちの魅力を、あなたはどうかどう見る？

#### <女将軍の改革力は？突破力は？>

現在9月14日の民主党代表選挙に関心が集まっているが、そこで問われているのは改革力と突破力。そんな視点から考えれば、断然菅直人よりも小沢一郎だが、さて結果は？それはともかく、当時の幕府の財政は現在のニッポン国と同じく、きわめて逼迫していたらしい。そこで、紀州の田舎から江戸城に乗り込んできた吉宗が最初に命じたのが質素儉約。財政出動をして大型公共事業を起こそうという発想がないのはいかにも女性的だが、質素儉約自体は悪いことではない。

特筆すべきは、その突破力。国会議員数の削減ができないのは、国会議員が自らのクビを切るのに消極的なため。また、数の削減、給与のカット、天下り禁止などの公務員改革ができないのは、過去の法律や慣例に縛られているため。つまり、改革のためには多少乱暴でも現状を突破する小泉純一郎元総理のような突破力が必要なのだが、今ドキそんな突破力を持った政治家やリーダーがいないのが実に痛い。ところが、自分の命令に従わず、将軍家の権威のためにはこれくらいの衣装は必要だと悪しき慣例に固執する間部（菊川怜）の職を直ちに解くという吉宗の英断は立派なもの。さらに、ラスト近くになって登場する「さあ、この国をどうしよう？」というセリフや、50人一斉のクビ切りという「あつと驚く大改革」を断行する姿を覗いていると、この女将軍の改革力と突破力は大したもの。願わくば、民主党の代表選挙終了後、新リーダーには是非ともこの女将軍のような改革力と突破力を発揮してもらいたいものだ。

2010（平成22）年9月10日記